

夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と 心理的ストレス反応との関連

—日本と中国の高校生を対象に—

張 新 荷*

本研究は、日本と中国の高校生497名を対象として、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連を検討した。パス解析の結果より日本の高校生において、認知反応の自分に関する恐れ、情動反応の不機嫌・怒りや抑うつ・不安、行動反応の回避的行動から心理的ストレス反応に対して正の有意なパス、また認知反応の親に関する恐れから負の有意なパスが示された。一方、中国の高校生におけるパス解析の結果より、自分に関する恐れ、不機嫌・怒りが心理的ストレス反応に対して有意に正の影響を与えることが示された。また、実際に両親の葛藤が存在する対象者のみを抽出し同じ分析を行った結果、日本の高校生において、自分に関する恐れ、不機嫌・怒りから心理的ストレス反応に対して正の有意なパスが示された一方、中国の高校生において、自分に関する恐れのみが心理的ストレス反応に対して有意に正の影響を与えることが示された。

キーワード：夫婦間葛藤, 高校生, 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応, 心理的ストレス反応

I 問題と目的

1.1 はじめに

平成25年度中に、全国207か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は73,765件(速報値)で、これまでで最多の件数となっている(厚生労働省, 2014)。児童虐待は4種類に分類され、その中には子どもの目の前で夫婦間葛藤を繰り広げること、家族に対して暴力をふるうこと(ドメスティック・バイオレンス:DV)も心理的虐待として含まれる。しかし、夫婦間葛藤や夫婦間暴力の問題に関してこれまで焦点化されてきたことは、夫婦関係や被害者としての女性・妻への影響であり、心理的虐待として子どもへの影響についての研究はあまり注目されてこなかった。これまで欧米において、夫婦間葛藤が子どもの発達に与える影響についての研究の傾向として特に乳幼児期あるいは児童期の子どもがいる家庭を対象として研究がなされてきた(Davis & Cummings, 1994)。しかし、青年期以降の子どもを対象とした研究においても夫婦間葛藤と内在化型問題(internalizing problem, 引きこもり, 抑うつなどの神経症的問題)との関連が示されている(Amato & Afifi, 2006; Davis & Windle, 2001)。また、日本の研究者も青年期に夫婦間葛藤にさらされることは、子どもの

*教育学研究科 博士課程後期

心理的適応や将来への展望に否定的な影響を及ぼす可能性がある」と指摘している(宇都宮, 2005)。青年期において、子どもは夫婦間葛藤からどのような影響を受けるのだろうか。

大淵(2002)によれば、どのような関係においても対人葛藤は起こりうるものであるものの、特に親密な関係において対人葛藤は多く生起するとされている。これはいわば日頃から多くの時間を共有する夫婦においては、葛藤は頻繁に起こりうることであるといえよう。対人葛藤について、これまでさまざまな研究者によって定義がなされてきているが、潜在的葛藤と顕在的葛藤の両方を葛藤として捉える立場と、顕在的葛藤のみを葛藤として捉える立場が見られる。しかし、日本人を対象として葛藤事例を検討した Ohbuchi & Takahashi (1994) は、日本人被験者の報告した葛藤事例の約半数において葛藤が潜在化されてしまい、採用される葛藤解決方略の大半が回避方略であることを明らかにした。この研究を受けて、日本人と英語圏からの外国人を対象にして同文化葛藤と異文化葛藤の解決方略を検討した大淵・菅原・Tyler・Lind (1995) は、多様な方略を用いた葛藤を被験者に報告させるため、顕在的葛藤に限定している。大淵ら(1995)は、葛藤経験を「人と表立って対立した経験」と定義し、先の理由により、葛藤には不満に思っただけで表には出さない主観的・潜在的葛藤もあるとしつつも、表面化した顕在的葛藤のみを取り上げている。潜在的葛藤に対して子どもは葛藤が存在するか存在しないかわからない可能性があるため、夫婦間葛藤に対する子どもの個人的体験に注目する本研究では、両親の表面化した顕在的葛藤に限定する。

1.2 夫婦間葛藤と子どもの精神的健康に関する理論モデル

夫婦間葛藤と子どもの精神的健康との関連を解釈するために、これまで着目されているものには、Grych & Fincham (1990) の認知状況的枠組み(cognitive-contextual framework)と、Davis & Cummings (1994)の情緒安定性仮説(emotional security hypothesis)とがある。

1.2.1 認知状況的枠組み

Grych & Fincham (1990) は、夫婦間葛藤に対する子どもの認知に焦点を当てており、認知状況的枠組みを提唱している(図1)。認知状況的枠組みでは、夫婦間葛藤にさらされる子どもの対応には二つの段階が含まれ、それぞれ一次処理と二次処理とよばれる。一次処理では、子どもは夫婦間葛藤の性質(肯定的/否定的など)、自分に与える脅威感、自分との関連性について評価する。子どもは夫婦間葛藤について、否定的と評価せず、あるいは重要であると考えない場合、注意が葛藤から移ると考えられる。一方、子どもは夫婦間葛藤について、否定的であり、また自分と関連していると判断すれば、二次処理が生じると考えられる。二次処理では、子どもは原因帰属(causal attributions)、責任帰属(attributions of responsibility)、非難(blame)、効力期待(efficacy expectation)などに関して評価する。その後、子どもは一次処理と二次処理を行った上で、情緒的反応が生じ、また一次・二次処理と情緒的反応によって、コーピング行動を行い、さらに、子どものコーピング行動は両親の夫婦間葛藤に影響を与えたと考えられる。

一次処理と二次処理に影響を及ぼす夫婦間葛藤の要因として、葛藤の強度(Intensity)、内容

(Content), 持続時間 (Duration)と解決 (Resolution)などが挙げられている。

一次処理と二次処理に影響を与える文脈の要因として、過去の夫婦間葛藤の経験 (previous experience with conflict), 認知された情緒的雰囲気 (perceived emotional climate), 気質 (temperament), ジェンダー (gender), 夫婦間葛藤の経過の予測 (expectations for the course of conflict), 現在の気分 (current mood)などが挙げられている。

認知状況的枠組みでは、情緒的反応やコーピング行動より認知的反応に焦点を当て、子どもの夫婦間葛藤に対する認知的反応としては葛藤の深刻さ (conflict property), 恐れ (perceived threat), 自己非難 (self-blame) が主に取り扱われている。葛藤の深刻さには頻度と強度と葛藤解決, 恐れには恐れと対処効力感, 自己非難には内容と自己非難が含まれるとした。Grych & Fincham(1993)は、葛藤の深刻さ (conflict property), 恐れ (perceived threat), 自己非難 (self-blame) が子どもの内在化型・外在化型問題と夫婦間葛藤との関連の媒介メカニズムであると主張している。

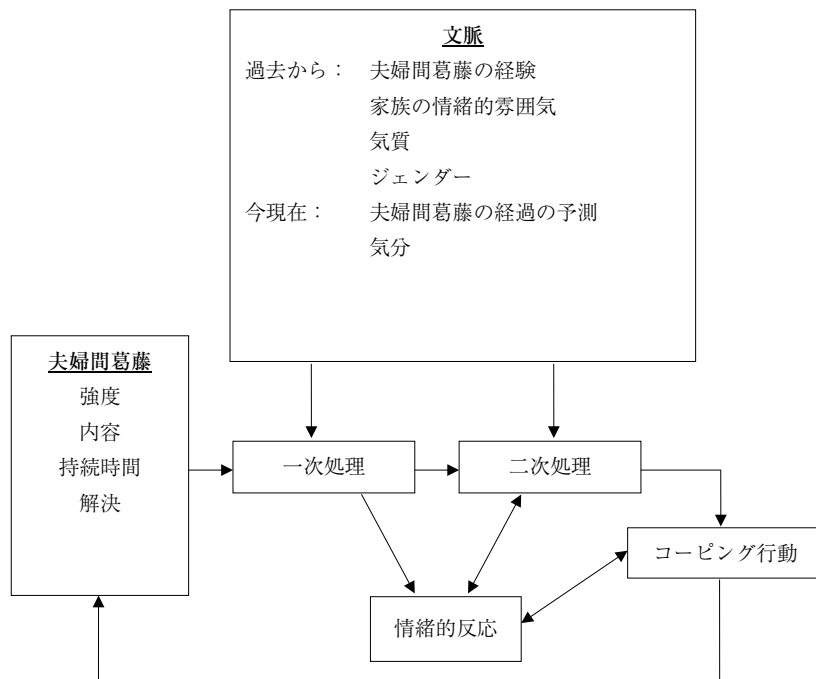


図1 夫婦間葛藤に対する子どもの認知状況的枠組み

1.2.2 情緒安定性仮説

Davis & Cummings (1994)は Bowlby の愛着理論と認知状況的枠組みに基づき、夫婦間葛藤が子どもや家族の情緒安定性 (Emotional security) を脅かすことによって子どもの精神的健康に影響を及ぼすという媒介メカニズムを主張している。具体的には、両親間葛藤の際の情動反応, 介入的・回避的行動を情緒的安定性についての指標とし、夫婦間葛藤と子どもの内在化型・外在化型問題との関連について検討を行っている。Cummings, Schermerhorn, Davies, Goeke-Morey, & Cummings

(2006)はこの仮説に基づき2年間の縦断的研究を行い、情緒安定が夫婦間葛藤と子どもの内在化・外在化型問題との関連の媒介変数であることを示している。これは、夫婦間での葛藤が一様に影響を及ぼすというのではなく、それに対する子どもの情緒的反応が子どもに与える影響を媒介していることを表している。

Davis & Cummings (1994)の情緒安定性仮説によると、夫婦間葛藤が子どもや家族の情緒安定性を媒介として子どもの精神的健康に影響を及ぼすには2通りのプロセスがある。一つは、夫婦間葛藤にさらされるのが子どものネガティブな情緒的反応を喚起し、情緒の統制と表出に影響を与える。このような経験が繰り返されると、子どもは情緒不安定になり、メンタルヘルスに問題が起こるといえる。もう一つは、夫婦間葛藤は両親の情緒安定性を脅かし、両親の情緒的不安定が親子関係や家族機能を媒介して子どもの情緒安定性に影響を与えるといえる。

また、子どもの情緒安定性は夫婦間葛藤や家族関係に対する認知、情動、行動に見られ、子どもの内在化・外在化型問題と関連していると指摘されている。例えば、夫婦間葛藤にさらされる時、子どもは夫婦関係や家族関係に関する認知に基づき、葛藤の深刻さなどについて評価する。子どもは問題が深刻であると判断すれば、警戒、不安、怒りなどの情緒的反応が喚起される。このような情緒的反応が持続されると、抑うつなど内在化型問題につながると考えられる。また、ネガティブな情緒的反応を軽減するために、子どもは自分から夫婦間葛藤への暴露を調整する。子どもの中には、夫婦間葛藤に巻き込まれて必死に止めようとする者もいれば、背負いきれないプレッシャーから、回避を選択する者もいることが考えられる。

一方、Turner & Barret (1998)は情緒安定性仮説と認知状況的枠組みのどちらも子どもの適応を説明するプロセスにおいて重要であると主張し、夫婦間葛藤に対する子どもの認知と子どもの両親に対する情緒的安定性(夫婦間葛藤の際の情動反応、介入的・回避的行動)はそれぞれ独自に子どもの適応と関連していることを示している。したがって、認知反応のみならず、情動反応と行動反応も検討することは重要であるといえる。以上のモデルに基づき、張(2013)は夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応を認知・情動・行動から捉え尺度を作成し、日本と中国の高校生を対象に尺度の因子構造・妥当性・信頼性を検討した。本研究では張(2013)の視点をを用い、夫婦間葛藤と子どもの精神的健康について検討を行うこととする。

1.3 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応

古屋・佐々木・音山・坂田(2007)の高校生の心理社会的ストレスに関する研究では、“家族間でもめごとがあったり、家族内の仲が良くないこと”や“自分のことで家族がもめたり、ぐちを言われたこと”などが家庭ストレスとして挙げられた。そのため、子どもにとって両親の葛藤にさらされることはストレスであり、心理的ストレスモデルの適用が考えられる。

Lazarus & Folkman (1984)は、「心理的ストレスモデル」とよばれる、心理社会的ストレスの認知的評価・対処理論を提唱し、今日の心理学的ストレス研究の理論的基礎を構築した。Lazarus & Folkman (1984)によれば、ストレスは日常生活で遭遇する外的な刺激(stressor: ストレッサー)に

対して、その刺激事態がどの程度脅威で負担となるものであるかという個人の判断過程(一次評価)、及び、脅威場面に対して直接的な反応ができるかどうかという判断過程(二次評価)という2つの認知的評価(appraisal: アプレイザル)を経た結果生じると考えられている。さらに、こうした判断過程を経た結果に基づいて、ストレスに対する何らかの対処行動(coping: コーピング)が発動される。コーピングを行った結果、ストレスが低減されれば不快な心理的反応(psychological stress reaction: 心理的ストレス反応)を生じさせることはないが、コーピングがストレスの低減にふさわしいものでなければ不快な心理的反応が生じてしまうのである。Lazarusが提唱した心理学的ストレスモデルの考え方では、認知的評価やコーピングといった、ストレスとそれによって引き起こされる反応の媒介要因を想定している点に特徴がある。

ストレス反応について、ストレスにさらされると、短期的には不安、怒り、抑うつなどの情動変化、及び心拍数が増加するなどの生理的な変化が生じる。長期的には、認知・行動的变化、身体的症状、社会的機能の低下なども見られる。認知・行動的变化には、自信喪失、思考力の低下、無気力、引きこもりなどが含まれる。身体的症状は、生体のホメオスタシス(生体内の環境を常に一定に保とうとする機能)を調節している自律神経系、内分泌系、免疫系の機能が低下することによって生じるさまざまなストレス関連性疾患を意味している。社会的機能の低下では、社会的に不適応な状態に至ったり、生活の質(QOL: quality of life)が低下したり、社会的生活を営むうえで何らかの障害が生じたりする。このように、ストレス反応の概念は幅広い意味で用いられ、そのような意味において、心理・社会的ストレス研究では、ストレス反応の総称として精神的健康という用語を用いる傾向が強い(加藤, 2008)。

張(2013)では夫婦間葛藤と子どもの精神的健康との関連を説明するために重要だと思われる変数、夫婦間葛藤に対する子どもの反応を検討したが、子どもの反応はどのように精神的健康とつながっているのかについて明らかにする必要があると考えられる。川島・眞築城・菅原・酒井・伊藤(2008)は夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連を検討した結果、男子については、自己非難や恐れ認知が抑うつに関連していたが、女子についてはこうした関連は見られなかった。また、Ruberstein & Feldman(1993)では、大淵(2005)の定義による「主張」や「攻撃」と類似する方略を選択する子どもにおいて、外在化型問題と内在化型問題双方に関連が示されている。同様に、「回避」や「拒否」に類似する方略を用いる子どもにおいても、外在化型問題と内在化型問題との関連が示されている。葛藤の当事者ではなく、第三者である子どもの認知や行動方略などと精神的健康との関連について検討することは重要であると考えられる。以上の内容を踏まえ、本研究では精神的健康と関連する変数心理的ストレス反応を取り上げ、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応との関連を検討する。

1.4 日中比較の必要性

張(2013)では日本と中国の高校生を対象に夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応を比較した結果、夫婦間葛藤にさらされた時、日本の子どもは中国の子どもより、自分が落ち着いていられ

る認知が強く、葛藤場面を回避する傾向が強かった。一方で、中国の子どもは、たとえ両親の葛藤が最終的に解決すると判断しても、情緒的反応が強く、葛藤場面に介入する傾向が強いことが示された。文化的自己観(北山, 1998; Markus & Kitayama, 1991)や個人主義/集団主義(Triandis, 1995)に関する議論で、対人関係と文化の双方向的影響可能性について数多く指摘されている。個々の文化の独自性が、その文化ならではの対人ストレスをもたらすこともありうる(橋本・吉田・矢崎・森泉・高井・Oetzel, 2012)。日本と中国の夫婦間葛藤に対する子どもの反応の特徴が、その反応ならではの心理的適応の問題と関連している可能性が推測できる。したがって、日中両国で夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連を検討することは意義のあることと考えられる。

1.5 本研究の目的

本研究では、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連を明らかにすることで、夫婦間葛藤からどのように子どもを守るのかに関する知見を提示したい。また、心理的要因や心理現象には文化差があり、文化によりその特徴や発生メカニズムも異なることがある(岩脇, 1995)。これまで、夫婦間葛藤が子どもに与える影響に関する文化的要因を考慮する研究はほとんどなされていないため、本研究では、文化的要因も考慮し、日中青年期の子どもを対象とする研究を行う。以上から、本研究は日中の高校生を対象に、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知・情動・行動反応が心理的ストレス反応に及ぼす影響を検討することを目的とする。

II 方法

2.1 調査対象者と手続き

対象者は日本と中国の高校生573名であり。両親(一人親の家庭も含む)の不在の方、回答に3個以上の欠損値が見られた方などの対象者を除き、有効回答数は合計497名であり、うち日本人187名、中国人310名であった。対象者の平均年齢は16.17歳($SD=1.01$ 歳)であった。データ数と確認的因子分析を勘案してここでは系列平均値を代入した上で分析を進めた。

2.2 測定方法

2.2.1 質問紙の構成

(1) フェイスシート:

調査対象者の基本属性(性別, 年齢, 学年), 及び家族構成について尋ねる項目から構成された。

(2) 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度(張, 2013):

調査対象者に対して、夫婦喧嘩の場面を想定し、その場面が今自分自身の家族で実際に起こっていると想像してください、と教示した上で、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応に関する項目を回答させた。想定させた場面は表1に示す。

①認知反応に関する項目：

親側要因の親の葛藤解決(4項目：両親はけんかをして、すぐ仲直りをするなど)、親に関する恐れ(4項目：私は、これから両親がどうになってしまうのかと心配になるなど)2因子、子側要因の自分に関する恐れ(7項目：私は、自分に何か悪いことが起こるのではと心配になる)、自分への対処効力感(3項目：私は、両親がけんかをして、解決策を思いつくなど)2因子、合計18項目である。これらの質問項目に対して「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の4件法で評定させた。

②情動反応に関する項目：

不機嫌・怒り(4項目：私は怒りを感じるなど)と抑うつ・不安(5項目：私は心に不安感があるなど)2因子、合計9項目である。これらの質問項目に対して「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の4件法で評定させた。

③行動反応に関する項目：

介入的行動(5項目：私は「もう止めて」と両親に言うなど)と回避的行動(4項目：私は自分の部屋へ逃げたり、外へ出たり、他のところに行くなど)2因子、合計9項目である。これらの質問項目に対して「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の4件法で評定させた。

④チェック項目：

チェック項目として、①先に示した場面をどのぐらいイメージできたか、「全くできなかった」から「非常にできた」の4件法で尋ねた。②あなたの両親は先に示した場面と似ているようなけんかをするか、「全くない」から「常にある」の4件法で尋ねた。③あなたの両親は先に示した場面以外のけんかをするか、「全くない」から「常にある」の4件法で尋ねた。

表1 想定させた夫婦喧嘩の場面

<p>今日は週末で、家族みんなが家にいます。もうすぐ昼食の時間で、お母さんが一人で昼食の準備をしていて、あなたはお父さんと一緒にテレビを見ています。そのとき、お父さんとお母さんの間では以下のような会話があります。</p> <p>母：「たまには手伝ってよ。テレビばかり見ないで。」</p> <p>父：「……」</p> <p>母：「手伝ってよ。聞こえないの？」</p> <p>父：「わかった。わかった。ちょっと待って。」</p> <p>母：「家の事はいつも私ばかり、疲れるわ。」</p> <p>父：「ちょっとテレビを見てただけじゃん。こっちも仕事で疲れてるんだから、少しくらい休ませてくれよ！」</p> <p>母：「あ～そう、そういうこと言うの。私だって、毎日ご飯作って、掃除して。毎日の家事だって疲れるのよ！」</p> <p>父：「君が疲れてないなんて誰も言ってないだろ！いつもグチグチとうるさいんだよ。」</p> <p>母：「私がいつグチグチ言ったのよ！？」</p>

(3) 心理的ストレス反応尺度(鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬楚・坂野, 1997)：

鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬楚・坂野(1997)のSRS-18(Stress Response Scale-18)を、この二週間の状態を問う形式に改変して使用。「ここ2,3日」の経験を問う原典の形式は直近のストレスイベントの有無の影響が大きく今回の使用目的には合致しないため改変した。不機嫌・怒り、抑うつ・不安、無気力の3因子、合計18項目である。これらの質問項目に対して「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の4件法で評定させた。

2.2.2 倫理的配慮

当質問紙には、親が口論することについてのイメージを尋ねる部分がある。子どもの目の前で口論を繰り返すこと、家族に対して暴力をふるうこと（ドメスティック・バイオレンス：DV）は心理的虐待になりうるため、このような体験がある生徒の心理的な負担を最大限に考慮する必要があると考える。したがって、このような経験がない生徒のみにイメージしてもらうため、アンケートの冒頭にDVなど心理的虐待に関する質問を設定することとした。また質問紙を実施する際は、(1)親が口論することについてのイメージに関して尋ねる部分があること、(2)回答はあくまで任意に基づいて行われること、(3)生徒さま個人が特定されないことがないことの三点について説明を行い、同意が得られた生徒のみを対象として実施することとした。

Ⅲ 結果

3.1 尺度の基本的検討

3.1.1 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度の確認的因子分析と内的整合性の検討

張(2013)が作成した夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度の日本と中国のサンプルにおける確認的因子分析を行った。分析の際、モデルの識別のために誤差変数から各観測変数への係数をすべて1に固定した。また、一次因子の各潜在変数から観測変数への係数において、一つの観測変数のパラメータは1に固定した。母数の推定方法には一般化最小2乗法を用いた。

その結果、「認知反応・親側」に関して、日本では、 $\chi^2(19)=48.251$, $p=.000$, GFI=.935, AGFI=.877, RMSEA=.091, 中国では、 $\chi^2(19)=45.497$, $p=.001$, GFI=.963, AGFI=.930, RMSEA=.067となった。「認知反応・子側」に関して、日本では、 $\chi^2(34)=80.587$, $p=.000$, GFI=.913, AGFI=.860, RMSEA=.086, 中国では、 $\chi^2(34)=81.996$, $p=.000$, GFI=.947, AGFI=.914, RMSEA=.068となった。情動反応に関して、日本では、 $\chi^2(26)=89.472$, $p=.000$, GFI=.893, AGFI=.815, RMSEA=.115, 中国では、 $\chi^2(26)=108.173$, $p=.000$, GFI=.922, AGFI=.865, RMSEA=.101となった。行動反応に関して、日本では、 $\chi^2(26)=75.773$, $p=.000$, GFI=.909, AGFI=.843, RMSEA=.101, 中国では、 $\chi^2(26)=118.319$, $p=.000$, GFI=.915, AGFI=.853, RMSEA=.107となった。

各因子の内的整合性は、日本では $\alpha=.59 \sim .92$, 中国では $\alpha=.60 \sim .87$ であった(表2)。

3.1.2 心理的ストレス反応尺度の確認的因子分析と内的整合性の検討

心理的ストレス反応尺度(鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬楚・坂野, 1997)の日本と中国のサンプルにおける確認的因子分析を行った。分析の際、モデルの識別のために誤差変数から各観測変数への係数をすべて1に固定した。また、一次因子の各潜在変数から観測変数への係数において、一つの観測変数のパラメータは1に固定した。母数の推定方法には一般化最小2乗法を用いた。

分析の結果、日本では、 $\chi^2(132)=321.850$, $p=.000$, GFI=.808, AGFI=.751, RMSEA=.088, 中国では、 $\chi^2(132)=334.471$, $p=.000$, GFI=.880, AGFI=.844, RMSEA=.070となった。

各因子の内的整合性は表3に示しており、いずれも十分な値が得られた。

表2 婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度における信頼性

		信頼性係数 α	
		日本	中国
認知反応・親側	親に関する恐れ	.85	.74
	親の葛藤解決	.59	.67
認知反応・子側	自分に関する恐れ	.85	.81
	自分への対処効力感	.69	.64
情動反応	抑うつ・不安	.92	.87
	不機嫌・怒り	.90	.76
行動反応	介入的行動	.80	.60
	回避的行動	.71	.79

表3 心理的ストレス反応尺度における信頼性

	信頼性係数 α	
	日本	中国
不機嫌・怒り	.91	.84
抑うつ・不安	.88	.83
無気力	.89	.77

3.2 各下位尺度の記述統計量および相関係数

各下位尺度の平均値、標準偏差を算出し、各下位尺度間の相関係数を算出した(表4, 表5)。

まず、認知・情緒反応と行動反応との相関をみていきたい。日中両国のサンプルでは、「親の葛藤解決」、「親に関する恐れ」、「自分に関する恐れ」、「不機嫌・怒り(情動反応)」、「抑うつ・不安(情動反応)」と「介入的行動」との弱い、あるいは中程度の正の相関が見られた($r=.14\sim.42, p<.05$)。「自分への対処効力感」と「回避的行動」との中程度の正の相関を示した(日本, $r=.36$, 中国, $r=.35, p<.01$)。

一方、日本のサンプルにおいて、「不機嫌・怒り(情動反応)」と「回避的行動」との弱い正の相関が見られ($r=.21, p<.01$)、中国のサンプルにおいて、「自分に関する恐れ」と「回避的行動」との弱い正の相関が見られた($r=.19, p<.01$)。

次に、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との相関をみていきたい。その結果、日中両国のサンプルでは、「親に関する恐れ」、「自分に関する恐れ」、「不機嫌・怒り(情動反応)」、「回避的行動」と心理的ストレス反応の3因子との弱い、あるいは中程度の正の相関が見られた($r=.15\sim.50, p<.01$)。

一方、中国のサンプルでは、「抑うつ・不安(場面)」と心理的ストレス反応の3因子との中程度の正の相関を示した($r=.29\sim.30, p<.01$)。

表4 各下位尺度の記述統計量および相関係数(日本)

	M	SD	相関係数										
			F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	F10	F11	
F1 親の葛藤解決	2.37	.57		.17*					.32**				
F2 親に関する恐れ	2.06	.80		-.35**	.78**	.62**	.23**	.36**		.18**	.29**	.21**	
F3 自分への対処効力感	2.62	.79			-.34**	-.32**			.36**				
F4 自分に関する恐れ	1.84	.66				.71**	.30**	.35**		.36**	.47**	.40**	
F5 抑うつ・不安(情動)	1.92	.82					.43**	.42**					
F6 不機嫌・怒り(情動)	2.19	.89						.23**	.21**	.50**	.41**	.43**	
F7 介入的行動	1.73	.61											
F8 回避的行動	2.71	.75								.20**	.22**	.20**	
F9 不機嫌・怒り	2.06	.79									.79**	.75**	
F10 抑うつ・不安	1.96	.75										.81**	
F11 無気力	2.10	.81											1

* $p<.05$. ** $p<.01$

表5 各下位尺度の記述統計量および相関係数(中国)

	M	SD	相関係数										
			F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	F10	F11	
F1 親の葛藤解決	2.73	.65		.37**			-.15**	.22**					
F2 親に関する恐れ	2.13	.74			.66**	.62**	.42**	.21**		.29**	.34**	.33**	
F3 自分への対処効力感	2.48	.71				-.22**	-.14*		.35**				
F4 自分に関する恐れ	1.80	.58				.60**	.47**	.14*	.19**	.43**	.46**	.45**	
F5 抑うつ・不安(情動)	2.14	.76					.66**	.32**		.31**	.30**	.32**	
F6 不機嫌・怒り(情動)	2.32	.70						.30**		.32**	.29**	.30**	
F7 介入的行動	2.21	.58							-.12*				
F8 回避的行動	2.21	.58								.15**	.19**	.20**	
F9 不機嫌・怒り	1.92	.66									.80**	.66**	
F10 抑うつ・不安	2.03	.67										.70**	
F11 無気力	2.18	.65											1

* $p<.05$. ** $p<.01$

3.3 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連

日本と中国の高校生における夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連を検討するため、両国の得点それぞれについてパス解析を行った。パスモデルの作成に当たっては、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応の各因子が関連し、それらの因子が心理的ストレス反応に影響するという仮説を設定し分析を行った。また、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度の各因子得点を観測される外生変数とし、心理的ストレス反応を心理的ストレス反応尺度の各因子から影響を受ける内生変数として設定した。母数の推定方法には最尤法を用いた。

日本の高校生における適合度は、 $\chi^2(16)=27.493$, $p=.036$, GFI=.975, AGFI=.897, RMSEA=.062であり、中国の高校生における適合度は、 $\chi^2(16)=17.572$, $p=.350$, GFI=.990, AGFI=.959, RMSEA=.018であり、十分な値が示された(図2, 図3)。

次に、「あなたの両親は先に示した場面と似ているようなけんかをしますか」あるいは「あなたの

両親は先に示した場面以外のけんかをしますか」というチェック項目で、「時々ある」や「常にある」を選んだ対象者のみを分析した。その結果、 $\chi^2(16)=11.272$, $p=.792$, GFI=.979, AGFI=.915, RMSEA=.000であり、中国の高校生における適合度は、 $\chi^2(16)=17.794$, $p=.336$, GFI=.986, AGFI=.943, RMSEA=.022であり、高い値が示された。その結果を図4, 図5に示す。

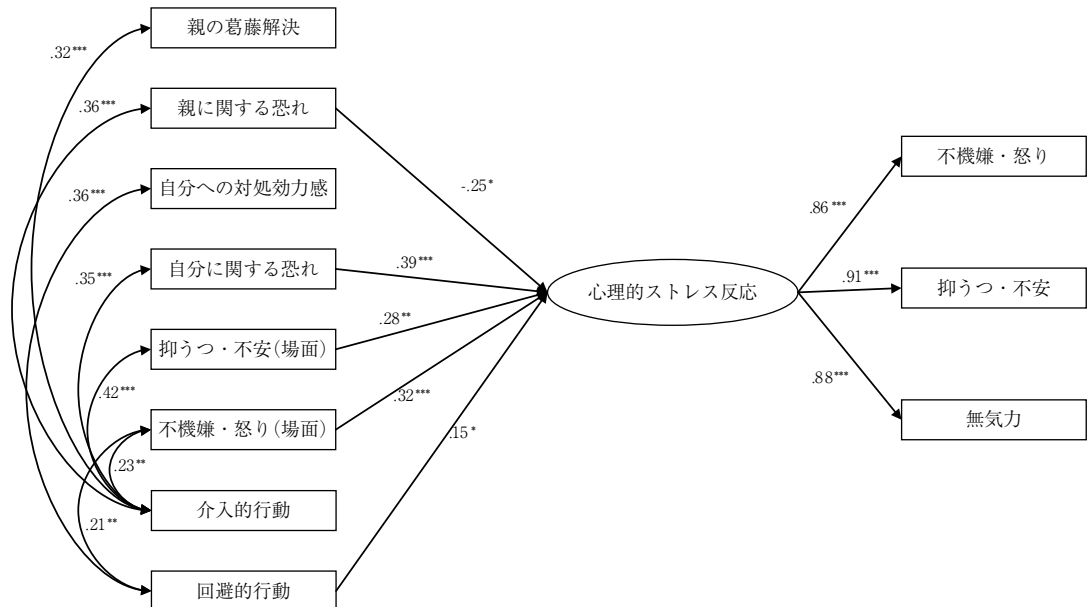


図2 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応のパス図(日本)

注) 誤差変数および有意ではなかったパス係数は、図より省略した。また夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応の各因子の相関について、認知・情動反応と行動反応との相関のみを示す。* $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$

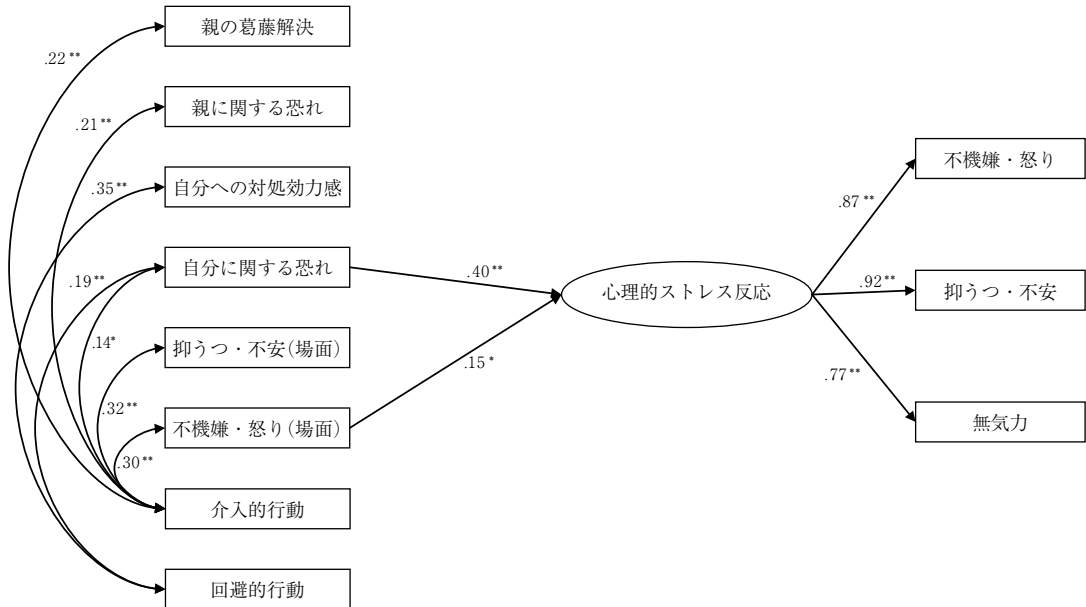


図3 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応のパス図(中国)

注) 誤差変数および有意ではなかったパス係数は、図より省略した。また夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応の各因子の相関について、認知・情動反応と行動反応との相関のみを示す。* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

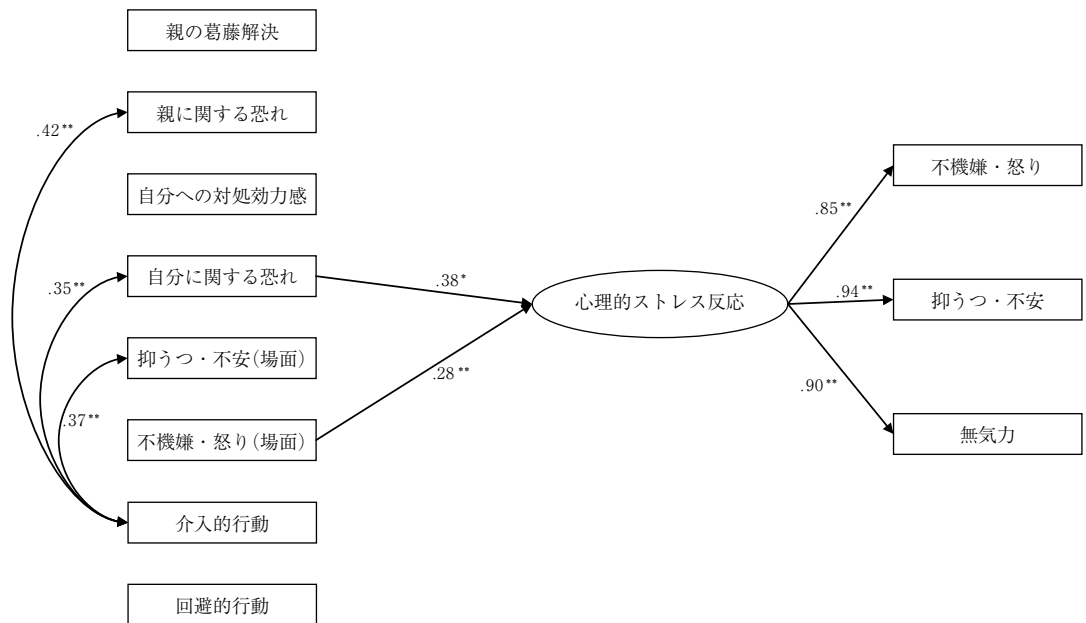


図4 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応のパス図(日本・けんかあり)

注) 誤差変数および有意ではなかったパス係数は、図より省略した。また夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応の各因子の相関について、認知・情動反応と行動反応との相関のみを示す。* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

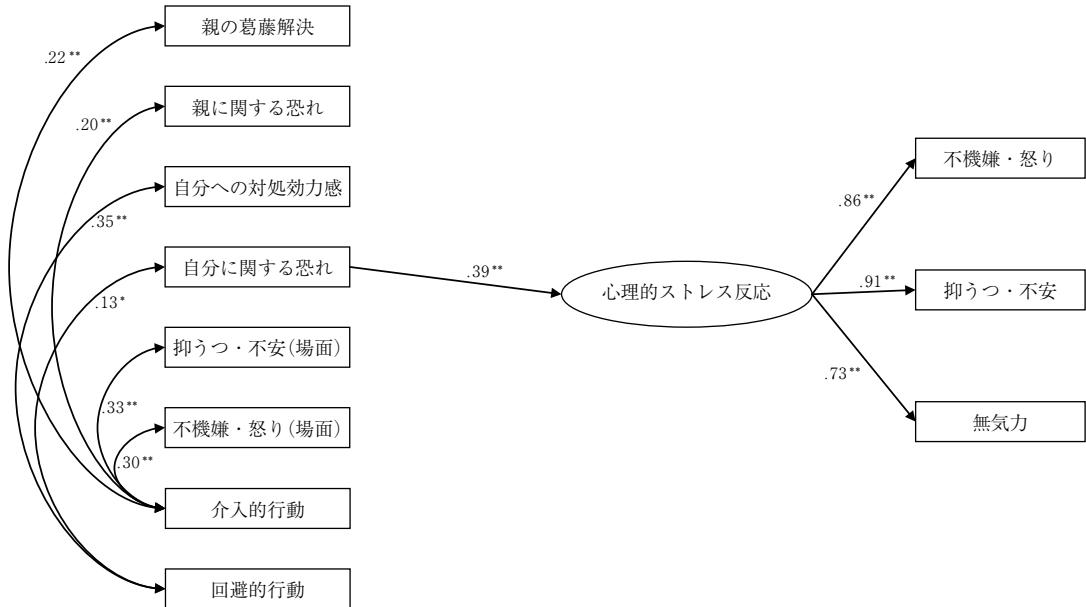


図5 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応のパス図(中国・けんかあり)

注) 誤差変数および有意ではなかったパス係数は、図より省略した。また夫婦間葛藤に対する青年期の子どもへの反応の各因子の相関について、認知・情動反応と行動反応との相関のみを示す。* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

IV 考察

本研究は、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連について、日本と中国の高校生を対象に検討することを目的として行った。

4.1 尺度の基本的検討

夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度の確認的因子分析の結果から、相対的に情動反応においてモデルの適合が良くないが、データとモデルの適合度はいずれの因子においても悪くないと判断した。また、心理的ストレス反応尺度の確認的因子分析の結果は十分な値が得られなかったが、原著者と同じ因子構造で分析を進めた。さらに、両尺度において信頼性もある程度確認された。

4.2 夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応と心理的ストレス反応との関連

パス解析の結果より日本の高校生において、認知反応の自分に関する恐れ、情動反応の不機嫌・怒りや抑うつ・不安、行動反応の回避的行動から心理的ストレス反応に対して正の有意なパス、また認知反応の親に関する恐れから負の有意なパスが示された。一方、中国の高校生におけるパス解析の結果より、自分に関する恐れ、不機嫌・怒りが心理的ストレス反応に対して有意に正の影響を与えることが示された。また、「あなたの両親は先に示した場面と似ているようなけんかをしますか」あるいは「あなたの両親は先に示した場面以外のけんかをしますか」というチェック項目で、「時々ある」や「常にある」を選んだ対象者のみを抽出し同じ分析を行った結果、日本の高校生において、

自分に関する恐れ、不機嫌・怒りから心理的ストレス反応に対して正の有意なパスが示された一方、中国の高校生において、自分に関する恐れのみが心理的ストレス反応に対して有意に正の影響を与えることが示された。以上の結果をまとめ、日本の高校生の自分に関する恐れや不機嫌・怒り、中国の高校生の自分に関する恐れと心理的ストレス反応との関連が明らかにされた。

まず、日中に共通する自分に関する恐れという認知反応と心理的ストレス反応との関連について見ていきたい。自分に関する恐れには、「私は、自分に何か悪いことが起こるのではと心配になる」、「私は、自分がこれまでのように暮せないのではと心配になる」、「私は、これから自分がどうになってしまうのかと心配になる」、「私は気を紛らわすためにどうしていいかわからなくなる」、「私は、両親が私に八つ当たりしてくるのではと心配になる」、「例え両親が言わなくても、両親がけんかしていると私が責められているような気がする」、「両親のけんかは私の落ち度によるものだ」などの7項目が含まれ、夫婦間葛藤にさらされる時、自分が脅かされるような恐れの認知を表す因子である。Grychら (Grych, Fincham, Jouriles, & McDonald, 2000; Grych, Harold, & Miles, 2003) は縦断的研究、および臨床群との比較研究から、夫婦間葛藤と内在化型問題 (internalizing problem: 引きこもり、抑うつなどの神経症的問題) との媒介変数として恐れの認知を挙げている。しかし、Grychらの恐れの認知は親に関する恐れと自分に関する恐れの両側面が含まれ、本研究では、この両側面を分け検討した結果、親に関する恐れと心理的ストレス反応との関連が見られず、自分に関する恐れのみの影響が見られた。さらに、山本・伊藤 (2012) では、青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連について検討した結果、「両親は、相手に対する自分の機嫌の悪さをそのまま私に向けてくる」や「両親は、相手のことで機嫌が悪い時に話しかけると、私に対しても当たり散らすことがある」などの項目が含まれる「巻き込まれ」認知と抑うつとの正の相関が示された。山本ら (2012) の「巻き込まれ」と本研究の「自分に関する恐れ」は、両親間の葛藤が起こる時、自分まで影響されることで共通し、「巻き込まれ」認知によって「自分に関する恐れ」認知が生じ、心理的ストレス反応につながるという流れも推測できる。本研究の結果は先行研究と一致するものになったと考えられる。

次に、日本のみに見られた不機嫌・怒りという情動反応と心理的ストレス反応との関連について述べていく。日本の高校生において、心理的ストレス反応は夫婦間葛藤場面で体験した不機嫌・怒り反応が繰り返し経験された場合に出現すると考えられる。ネガティブな情動反応の中、怒りが高校生の心理的適応に影響を及ぼすことについて、古屋・音山・坂田 (2008) の高校生の心理的ストレス過程に関する研究では、引きこもり、無気力、攻撃は怒りによって引き起こされていることが示されている。中国では情動反応と心理的ストレス反応との関連が見られなかった原因として、ネガティブな情動反応の表出と関係していると思われる。崔・新井 (1998) は非主張的であることや怒りを含めた不快情動の表出を抑制することが精神的な不健康と関連することを示している。また、日本人はイギリス人などに比べて、他者に対する怒りの表出を抑制することが指摘されている (Argyle, Henderson, Bond, Iizuka, & Contarello, 1986)。さらに、意見の対立場面での問題解決方略について、羅 (2008) は中国と日本の大学生を対象に比較した結果、中国では男女ともに直接的主張

を多く用いるが、日本では男子が相手との関係を重視するために自分の要求や感情を抑えるという関係重視抑制を行い、女子が間接的主張を多く用いていた。ゆえに、日本の子どもは中国の子どもより夫婦間葛藤場面で感じた不機嫌・怒り感情を抑制する傾向があり、それは心理的ストレス反応につながるのであろう。

今回の研究では行動反応と心理的ストレス反応との関連が見られなかったが、楊・方・林(2002)では、介入的行動に近い「直接的対応」や回避的行動に近い「間接的対応」と抑うつや主観的幸福感との関連を検討した結果、「直接的対応」と抑うつとの関連が見られず、「間接的対応」と抑うつとの負の相関が見られ、またどちらでも主観的幸福感との正の相関が示された。子どもの精神的健康を表す変数の選択によって対処行動の影響が異なるため、今後さらなる研究が求められる。

4.3 問題点と今後の課題

本研究における問題点及び課題は、以下の3点を挙げる。

まず、夫婦間葛藤が性別によって子どものメンタルヘルスに及ぼす影響については、一貫した結果が得られていない(山本・伊藤, 2012)。例えば、川島ら(2008)は両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連を検討した結果、男子については、自己非難や恐れ認知が抑うつに関連していたが、女子についてはこうした相関は見られなかった。これから、子どもの性別によって夫婦間葛藤が及ぼす影響が異なるかを検討する必要があると考えられる。

次に、夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの反応尺度で設定した家事に関する葛藤場面は、母が主張し、父も主張するものであったが、夫婦間コミュニケーションのあり方として、葛藤時における夫側の撤退行動(難波, 1999)や、中年期夫婦における夫側の無視・回避、威圧など非対等な関係性の問題が挙げられており(平山・柏木, 2001)、主張対主張の葛藤がなされてこなかったことが予想される。したがって、そのような日本の夫婦関係の実情に見合った場面を作成する必要がある。

最後に、本研究では認知状況的枠組みと情緒的安定仮説に基づき、夫婦間葛藤にさらされることが直接的に子どもの心理的ストレスに与える影響を検討したが、親の養育態度、家族の機能など間接的な影響もあるため、今後はこれらの要因を含めた、より統合的なモデルの検討が望ましいと思われる。

【引用文献】

- Amato, P. R. & Afifi, T. D. (2006). Feeling Caught Between Parents: Adult Children's Relations With Parents and Subjective Well-Being. *Journal of Marriage and Family*, 68, 222-235.
- Argyle, M., Henderson, M., Bond, M., Iizuka, Y., & Contarello, A. (1986). Cross-Cultural Variations in Relationship Rules. *International Journal of Psychology*, 21, 287-315.
- 崔 京姫・新井邦二郎. (1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係. *教育心理学研究*, 46, 432-441.
- Cummings, E. M., Schermerhorn, A. C., Davies, P. T., Goeke-Morey, M. C., & Cummings, J. S. (2006). Interparental

- Discord and Child Adjustment: Prospective Investigations of Emotional Security as an Explanatory Mechanism. *Child Development*, 77, 132-152.
- Davis, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital Conflict and Child Adjustment: An Emotional Security Hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.
- Davis, P. T., & Windle, M. (2001). Interparental Discord and Adolescent Adjustment Trajectories: The Potentiating and Protective Role of Intrapersonal Attributes. *Child Development*, 72, 1163-1178.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1990). Marital Conflict and Children's Adjustment: A Cognitive-Contextual Framework. *Psychological Bulletin*, 108, 267-290.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1993). Children's Appraisals of Marital Conflict: Initial Investigations of the Cognitive-contextual Framework. *Child Development*, 71, 1648-1661.
- Grych, J. H., Fincham, F. D., Jouriles, E. N., & McDonald, R. (2000). Interparental Conflict and Child Adjustment: Testing the Mediation Role of Appraisals in the Cognitive-contextual Framework. *Child Development*, 71, 1648-1661.
- Grych, J. H., Harold, G. T., & Miles, C. J. (2003). A Prospective Investigation of Appraisals as Mediators of the Link Between Interparental Conflict and Child Adjustment. *Child Development*, 74, 1176-1193.
- 橋本 剛・吉田 琢哉・矢崎 裕美子・森泉 哲・高井 次郎・Oetzel, J. G. (2012). 対人ストレスの日米比較—親密性とソーシャルスキルの観点から. *実験社会心理学研究*, 51, 91-103.
- 平山順子・柏木恵子. (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度: 夫と妻は異なるのか?. *発達心理研究*, 12, 216-227.
- 古屋 健・佐々木悠・音山若穂・坂田成輝. (2007). 高校生の心理的ストレス過程に関する研究: II. 心理社会的ストレスラーの分析. *群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編*, 56, 279-298.
- 古屋 健・音山若穂・坂田成輝. (2008). 高校生の心理的ストレス過程に関する研究: III. 身体反応と問題行動. *群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編*, 57, 151-168.
- 岩脇三良. (1995). 異文化間研究の方法論に関する考察(異文化間心理学と文化心理学). *社会心理学研究*, 10, 180-189.
- 加藤 司. (2008). 対人ストレスコーピングハンドブック. ナカニシヤ出版.
- 川島亜紀子・眞築城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤教子. (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連. *教育心理学研究*, 56, 353-363.
- 北山 忍. (1998). 自己と感情. 共立出版.
- 厚生労働省. (2014). 平成25年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000052785.html>
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- 羅 蓮萍. (2008). 社会的問題解決の方略と目標—中国と日本の大学生における比較分析—. *東アジア研究*, 6, 39-55.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 難波淳子. (1999). 中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての—考察—事例の分析を通して. *岡山大学大学院文化科学研究科紀要*, 8, 69-85.

- Ruberstein, J. L. & Feldman, S. S. (1993). Conflict-Resolution Behavior in Adolescent Boys: Antecedents and Adaptational Correlates. *Journal of Research on Adolescence*, 3, 41-66.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬楚力也・坂野雄二. (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討. *行動医学研究*, 4, 22-29.
- Turner, C. M., & Barrett, P. M. (1998). Adolescent Adjustment to Perceived Marital Conflict. *Journal of Child and Family Studies*, 7, 499-513.
- Ohbuchi, K. I., & Takahashi, Y. (1994). Cultural Styles of Conflict Management in Japanese and Americans: Passivity, Covertness, and Effectiveness of Strategies. *Journal of Applied Social Psychology*, 24, 1345-1366.
- 大淵憲一. (2002). 人間関係と攻撃性. 島井哲志・山崎勝之(編). *攻撃性の行動科学:健康編*. ナカニシヤ出版, pp. 17-34.
- 大淵憲一. (2005). 職場での対人葛藤発生時における解決目標と方略. *産業・組織心理学研究*, 16, 13-33.
- 大淵憲一・菅原郁夫・Tyler, T. R.・Lind, E. A. (1995). 葛藤における多目標と解決方略の比較文化的研究:同文化葛藤と異文化葛藤. *東北大学文学部研究年報*, 45, 187-202.
- 宇都宮 博. (2005). 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知—子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント. *教育心理学研究*, 53, 209-219.
- 山本倫子・伊藤裕子. (2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連. *家族心理学研究*, 26, 83-94.
- 楊 阿丽・方 晓义・林 丹华. (2010). 父母冲突,青少年应对策略及其与青少年社会适应的关系. *心理发展与教育*, 1, 37-43.
- 張 新荷. (2013). 夫婦間葛藤に対する子どもの反応に関する日中比較研究. *東北大学大学院教育学研究科平成24年度(2012年度)修士論文*.

Adolescents' Response to Marital Conflict and Psychological Stress Response between Japanese and Chinese High School Students

Xinhe Zhang

(Graduate student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study aimed to investigate the relationship between adolescents' response to marital conflict and psychological stress response in Japan and China. The participants were 187 Japanese students and 310 Chinese students. In Japanese students, "threat about self" from the cognitive response, "irritation/anger," "depression/anxiety" from the emotional response and "avoidance behavior" from the behavioral response showed a statistically positive path coefficient to psychological stress response. "Threat about parents" from the cognitive response showed a negative path coefficient to psychological stress response. In Chinese students, "threat about self" from the cognitive response and "irritation/anger" from the emotional response showed a statistically positive path coefficient to psychological stress response. Then the same analysis was performed on participants who were experiencing parents' conflict in real life. In Japanese students, "threat about self" from the cognitive response and "irritation/anger" from the emotional response showed a statistically positive path coefficient to psychological stress response. In Chinese students, "threat about self" from the cognitive response showed a statistically positive path coefficient to psychological stress response.

Key Word : marital conflict, high school students, adolescents' response to marital conflict, psychological stress response